

「住む×働く」を体感 職人の手仕事を伝える工務店のオフィス

DATA 工務店の事務所リノベーション
 面積：1階 82㎡ (24.75坪)
 2階 159㎡ (48.00坪)
 3階 139㎡ (41.96坪)
 合計 380㎡ (114.71坪)
 構造：鉄骨造
 竣工：2021.7.17
 場所：東京都東村山市本町 2-22-11

1 「集中・共有・交流」を空間の核に

東村山市を拠点に多摩地域で木造住宅や木造施設、家具や生活道具をつくる工務店の拠点をリノベーション。もともとは大手ハウスメーカーが建築した建物を中古で購入し使用していたものの、自然素材を全く用いていない空間で、モデルハウスなどの拠点とのギャップを指摘されたり、図面や資料が雑然とした残念な状況だった。創業 50 周年を機にスタッフみんなで一斉発起し、自分たちの働き方を見直して誇りをもてる空間をつくろうと決意。暮らしや建築を自ら体感・体験し、伝えていくために「集中・共有・交流」を空間づくりの核に定め、計画を進めていった。

空間デザインのポイント
 1. 素材・技術は木の家と同じ手法・考え方で
 2. 照明計画を見直し、木の家のように居心地の良いオフィス空間
 3. 大工や日本の家具メーカーが手がけるプロダクトを使用



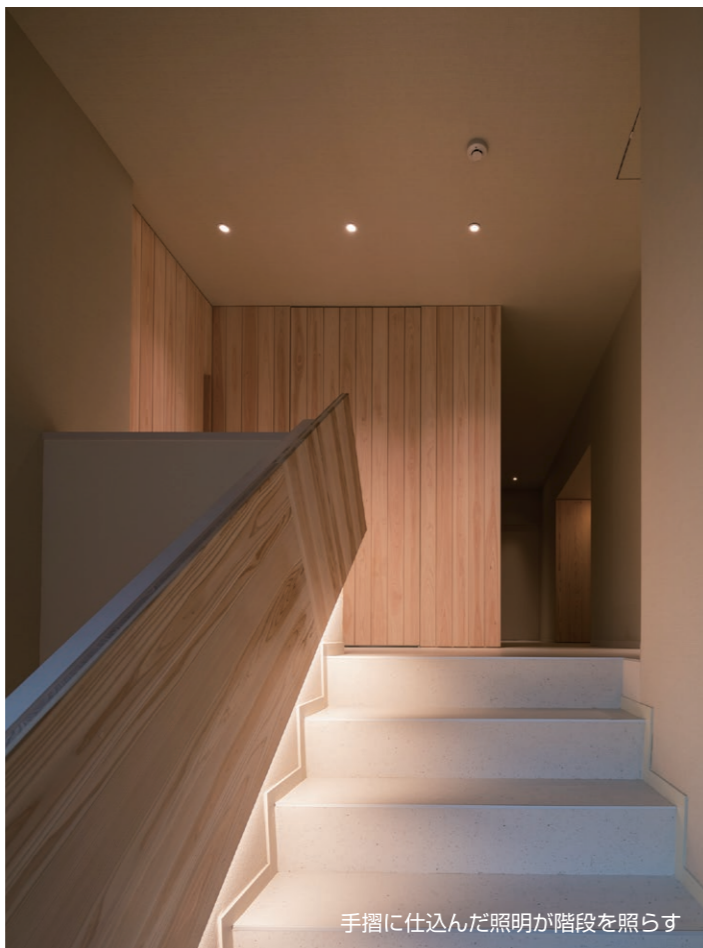
1階のキッチン・卓球台テーブルは「交流」の場



2階ホールは打合せや食事にも活用する「共有」の場



落ち着いた雰囲気ワークスペース



手摺に仕込んだ照明が階段を照らす



紙の間 | 大切な契約など紙を扱う部屋には、障子や和紙を空間に採用

2 ABWとフリーアドレス 多様に場を活用

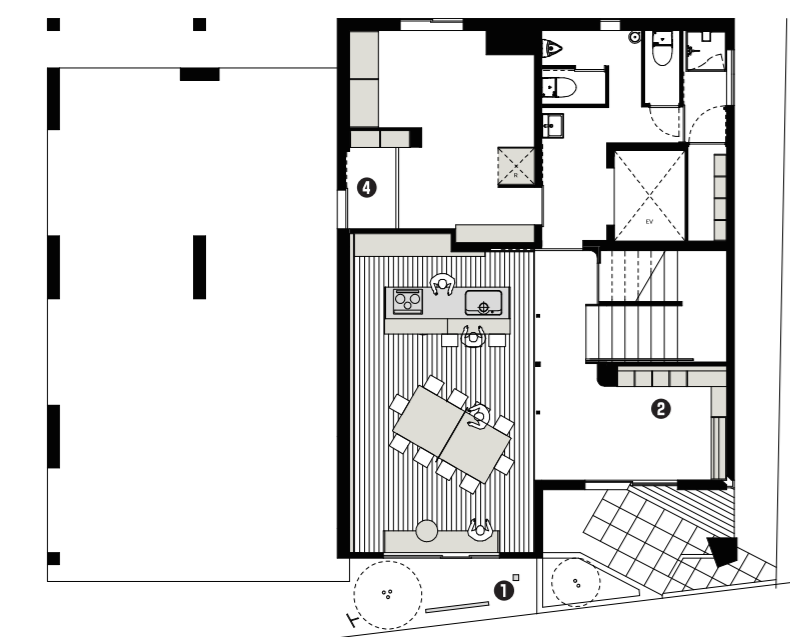
働き方が多様化する時代に、工務店としてどんな提案ができるだろう？と採用したのが「ABW (Activity Based Working) とフリーアドレス」というスタイル。デスクは個人用に固定せず、スタッフの働き方にあわせて多様に場を活用できるように設計。1階のキッチンや卓球台テーブルではお客様を迎えて打合せをしたり食事や料理を楽しんだり、2階のワークスペースはそれぞれが多様に仕事ができるよう「集中」スペースや「共有」スペースを設けている。空間の機能を整理して使い方を限定しすぎずに余白を持たせることで、働く人次第でさまざまな使い方をできる。

空間の居心地の良さを生み出すための重要な要素として照明計画がある。全体を必要以上に明るくするのではなく、照明をデスク上や手元に絞ることで落ち着いてグッと集中できる席を設けたり、空間に陰影を生み出すことで、木の家のような居心地の良い仕事場となっている。

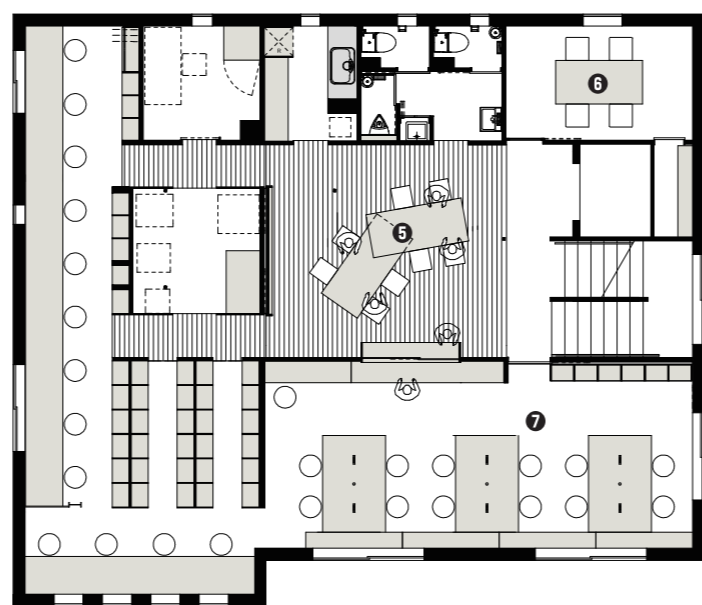


水まわりにこだわり
 気持ちの良い職場環境
 快適で気持ちの良いオフィスとするためにトイレの使い勝手や衛生面にも細かい工夫をしている。また水まわりに付随する建具を整理してすっきりとしたデザインに。

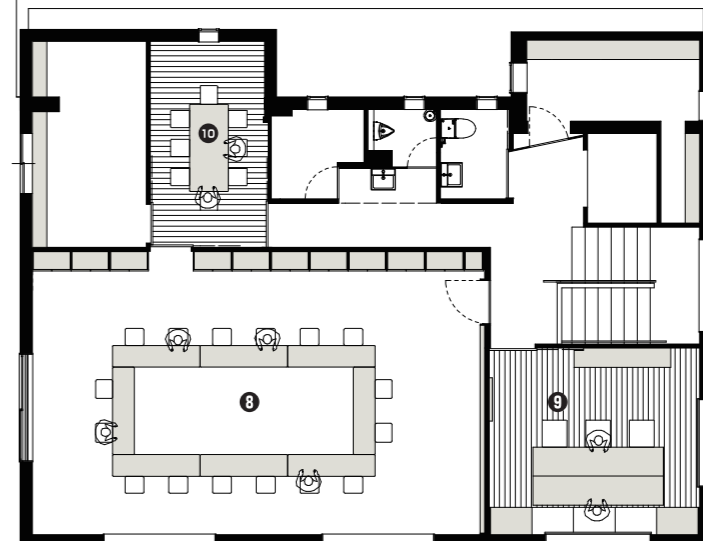
PLAN



- 1F コミュニケーション**
- あいびの庭 造園家の小林賢二さんによる小さき庭。通ゆく人や事務所を訪れる人を癒やす庭が和ませる。催しや企画展示を伝える掲示板や、彫刻家の北川陽史さんの手によるミラースタンドも見どころ。
 - ギャラリー エントランスに設けたギャラリー。スタッフが定期的に展示会を企画。建築や暮らし、道具や手仕事にまつわるモノやコト、ヒトの魅力伝える場所。
 - キッチン スタッフ同士で料理を楽しんだり、地域の人をお招きしてイベントを開催。価値観の近い人との交流が生まれる、地域に開くコミュニケーションスペース。
 - 社員用玄関 社員の出入口。建築資材の荷受けスペースとしても活用。



- 2F ワークスペース**
- ホール ワークスペースと給湯室、トイレの間にある場所。軽い打合せや作業、休憩などで使用。壁面ホワイトボードに図を描いて納まりを検討したりディスプレイを行う。音米彫森林組合のくり材を壁と床に板張り。スタッフ同士の交流の場になることを期待している。
 - 会議 来客時にお誘いする応接間。打合せで使用。本社をこの建物に移した頃からの神輿が働く人々を見守る。
 - オフィススペース フリーアドレス方式を採用し、ABW (Activity-based working) に基づき様々な場所で仕事を、個人の取捨スペースを中央に配置し、その間にワークスペースを設ける。明るく開放的な場所や落ち着いた雰囲気の隠れる場所をその日の仕事にあわせて選ぶことができる。



- 3F ミーティング・スタジオ**
- 上の間 (会議室) 相別棟の土台をつくる大事な部屋。本社事務所では一番広い空間で、毎朝のスタッフの朝礼やさまざまな会議を行う。壁は珪藻土クロス、床は土をイメージしたカーペット仕上げ。
 - 紙の間 (図会議室) 契約書など紙に貼る場所でもあるので、障子紙や壁紙の仕上げに。時計も紙。床はヒノキ材。大きな木の障子を透した光や木のぬくもりに包まれる空間。
 - 木の間 Web会議などを行うとともに、オンラインで暮らしやものづくりの魅力を発信することを想定した空間。カラマツの床材+木の家具+壁を板張り+珪藻土塗りの仕上げ。



3 職人の手仕事を伝える ものづくりの発信拠点

生まれ変わった社屋は、家づくりをする大工や左官をはじめ、多くの職人の手仕事により美しい空間となった。さらに日常的に「使えるアート」として、彫刻家が手がけた鉄製の建具を採用したり、建築と一体となる家具「窓ベンチ」からは造園家による庭や植栽を眺められ、スタッフの食事や休憩時間の癒しの場所になっている。そして新たな試みとして、エントランスにギャラリーを設けて1年に3回ほどの企画展を催していく。現在は「職人の道具展」として、工務店と深い関わりのある職人が長年愛用してきた道具を展示中。いいものをつくっていれば知ってもらえるという考え方ではなく、「つくることと同じくらい伝えることに取り組む」、そんな職人や工務店のものづくりの発信拠点をこのオフィスで目指していく。